



輝け！北っ子！

文責：校長 大内雅之



あけましておめでとうございます ～「一年の計は元旦にあり」「有終の美」～

令和3年度の幕開け、そして、第3学期のスタートです。今年もどうぞよろしくお祈りします。

さて、今年の冬休みは、コロナ禍でなかなか人との交流や外出なども気にかかり、例年通りとはいかなかったところもあったかとは思いますが、いかがだったでしょうか。そんな中であっても、子ども達にとっては有意義な時間、楽しい思い出ができた時間となったことと思っています。

2学期末に子ども達と2つの約束をしました。一つは「死なないこと」もう一つは「コロナ対応」をしっかりとすることでした。結果は・・・子ども達は全員冬休み中、しっかりと命を守り、誰もコロナウィルスに感染する子はいませんでした。ホッとしました。しかし、まだまだ新型コロナウイルスの猛威はおさまらず、予断を許さない状況が続いています。今学期も一人一人ができることを継続していかなければなりません。マスク、手洗い、換気、ソーシャルディスタンス等、できることは限られていますが、気を抜かず、しっかりと対応を継続していかなければならないと思っています。どうぞよろしくお祈りします。

始業式では校長との約束を守ってくれたことのお礼に続き、この言葉と意味を紹介しました。

「一年の計は元旦にあり」

(ことに当たっては最初にしっかりと計画を立ててから臨むことが大切であること)

「有終の美」

(物事をやりとおし、最後をりっぱに仕上げる。結果がりっぱであること)



学年のまとめの3学期です。ご家庭でも子ども達を励ましながら、見守ってあげてください。

また、なかなか全校生に向けて話す機会がとれないので、始業式の時間をつかって北小の歴史などについてお話をしました。学校ができてからもうすぐ150年になること。以前は南小と北小が一緒だったこと、北小は第二尋常高等小学校といって男子校だったこと等を話しました。(ご家庭でも以前の北小の様子などを子ども達に話してあげてください。)さらに、北小出身の先輩「大山忠作先生」と「高橋信次先生」について校長室にある写真を見せながらお話ししました。(概略は裏面)お二人ともわが国の文化功労の最高勲章である「文化勲章」を受賞されている方で、日本画の大家、CTスキャンの礎を築いた放射線治療の第一人者でした。偉大な先輩のを知ることで、子ども達が北小に誇りを持ち、あこがれを感じ、+αの心で自分の人生を切り拓いていくことを期待しています。がんばれ北っ子！！



始業式の後には、「登校班会議」を行いました。安全な登校にむけて、全校生で確認しました。

保護者の皆様からの声をお待ちしています。

～学校に対するご意見・ご感想等お気軽にお寄せください(または assist.nihonmatsukita-e@fcs.ed.jp まで)～

..... 切り取り線

大山 忠作先生 (オオヤマ チュウサク) 大正 11 年 5 月 5 日～平成 21 年 2 月 19 日



■略歴・解説■ (二本松市教育委員会 IT 美術館より)

染物業を営む大山豊治・きくの次男、2 男 4 女の第 3 子として生まれる。幼児期を安達太良山と阿武隈川に囲まれた自然環境の中で過ごし、二本松第二尋常高等小学校卒業後に上京、東京美術学校(現東京芸術大学)で日本画を学ぶ。第 2 次世界大戦の戦況悪化により、学徒出陣のため繰り上げ卒業となり戦地へ向かう。

終戦を迎え戦地から復員すると、東京都美術館で開催中だった第 1 回日展を見て感動し、制作意欲を掻き立てられ、第 2 回日展では「O 先生」を初出品し初入選。以後、日本画研究団体「一采社」に参加、山口蓬春に師事し、日展を主な舞台として、描きたい物を描くという姿勢で、人物から宗教、花鳥、風景画まで幅広い題材の作品を発表し続ける。代表的な業績としては、法隆寺金堂壁画再現模写への参加、日本芸術院賞受賞作「五百羅漢」、成田山新勝寺光輪閣襖絵「日月春秋」28 面及び「杉」「松」「竹」22 面、同じく聖徳太子堂壁画 6 面「白鷺」「蓮」「桜」「牡丹」「菊」「楓」の制作などが挙げられ、日展においても、理事長、さらには会長として日本最大の芸術団体の舵取りを行い、わが国の芸術文化の振興・発展に尽力したことが特筆される。平成 18 年には、写生を踏まえた平明で骨太な描写、さらにその画技と団体への貢献により、芸術文化の向上に寄与したことが認められ、文化勲章を受章した。

高橋 信次先生 (タカハシ シンジ) 明治 45 年 1 月 28 日～昭和 60 年 4 月 2 日



■略歴・解説■ (二本松市HPより)

明治 45 年(1912 年)高橋定之助・サキの次男として、二本松町亀谷に出生。大正 13 年(1924 年)町立第二尋常高等小学校を卒業、のち旧制安達中学校、旧制第二高等学校理科乙類を経て、昭和 13 年(1938 年)に東北帝国大学医学部を卒業後、同放射線医学教室に入局。当時間接撮影法を発明し、集団結核検診の普及に高名であった放射線医学界の重鎮・古賀良彦教授との師弟関係を深め、同 17 年には講師として生涯の道である放射線医学への道を歩み始めた。

昭和 19 年(1944 年)医学博士を取得、同 22 年に青森医学専門学校、同 24 年に弘前大学教授として教鞭をとる一方、従来の断層撮影に対してより高度な X 線廻転撮影法の研究に熱意を傾け、同 25 年にその研究で東奥賞を受賞。同 29 年には名古屋大学教授に招請され、新たに放射線医学講座を開設。同 32 年には廻転撮影法研究で中日文化賞を受賞し、CT の基本原理に結びつく廻転横断撮影の画期的な検査法を研究発展、かつ診断的価値の高い CT への基礎づくりを始めた。やがて国際学会で認められ、イタリアのゼノア市での第 3 回(昭和 30 年)・第 4 回(昭和 31 年)国際断層撮影講習会へ特に講師として招かれている。また、同 34 年には同医学部附属病院中央放射線部長として放射線治療の第一線で活躍、検査法の開発・普及に尽力、さらに国際舞台でもその研究成果を克明に報告するなど、“日本の高橋”を世界に認識させた。

その後の業績は、昭和 38 年(1963 年)第 1 回日本癌治療学会において「原体照射法」を特別報告、同 39 年世界保健機構(WHO)放射線専門委員、同 41 年国際放射線防護委員、同 42 年米国放射線学会名誉会員、同 44 年第 12 回国際放射線会議副議長(東京)、同 46 年科学技術庁放射線審議会会長、同 47 年「生体の X 線による解剖」日本医師会医学賞受賞、同 49 年浜松医科大学副学長・日本癌治療学会名誉会員、同 50 年ドイツ放射線学会名誉通信会員など数知れない。

さらに、昭和 52 年(1977 年)浜松医大附属病院長に就任、また恩賜賞日本学士院賞を受賞している。同 54 年には文化功労者顕彰、同 55 年愛知県がんセンター総長、同 56 年日本学士院会員、同 58 年北米放射線学会名誉会員など、国内外にその名を馳せた。

昭和 59 年(1984 年)、わが国の文化功労の最高勲章である文化勲章を受賞、同 60 年には愛知県がんセンター名誉総長に推された。さらに当市では、最初の二本松市名誉市民に推戴した。しかし、この年 4 月 2 日、愛知県がんセンター病院において逝去、享年 74 歳、蓮華寺に眠る。7 月には、スウェーデン王立科学アカデミーより栄えあるゴールドメダルを授与されており、国内はもとより国外における功績の偉大さを示している。